琉球大学学術リポジトリ

権威主義尺度に関する一研究 — Ｆスケールの検討 —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2011-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 与那嶺, 松助, Yonamine, Matsusuke メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19152

権威主義尺度に関する一研究

―― Fスケールの検討 ――

与那嶺　松　助

I　問　　題

権威主義（Authoritarianism）の問題は，反民主的偏見やファッショ的イデオロギーの心理的な基盤となるようなパーソナリティの問題としてとりあげられていることは周知のごとくである．その初期における研究としては，権威主義の概念規定に重要な役割を果している E. Fromm の業蹟(1)* がとくに注目されるが，その後の実証的研究としてもつとも注目されるのは，T. W. Adorno らの調査研究(2)であろう．Adorno らの研究は，次の2点において吾々の注意を惹くものである．その第1は，ideological level における偏見と，personality における諸特徴とが密接に関連している，ということを明らかにしている点である．その第2は，そのようなパーソナリティ傾向を測定する用具として，ファッシズム尺度（F, or Fascism scale）を作製し，権威主義の数量的表現や比較を可能にした点である．第1の点，即ち人格的要因が偏見の重要な変数であるということ，あるいは権威主義的人格とよばれる一般的傾向が存在するということについては疑う余地がないようである(3, p.485, 4, p.303)，しかし乍ら，F scale によつて測定される権威主義的徴候群を構成する人格要因の特性や範囲については，すなわち F scale の測定する権威主義の意味，内容については，Adorno らの "The Authoritarian Personality" の発刊以来，数多くの研究が出ているにも拘らず，今なお一致した見解は確立されていない（4, p.303; 5, p.157）．Adorno ら以後の多くの研究は，この問題の解明に重点がおかれているといつても過言ではないであろう．しかし権威主義の意味は，それぞれの文化において現実に調査された結果にもとづく実証的，操作的知識として確立されなくてはならないことはいうまでもないであう．かくして異つた地域や文化における資料の比較研究により，権威主義を普遍的に定義する可能性も期待されるであろう．本研究の目標は，吾々の文化において権威主義の意味を解明することであるが，本稿では，まずその出発点として，Adorno らの F scale が吾々の文化においてどのような機能をもつかを検討することだけに，その目的を限らなければならない．すなわ

---

* Fromm はファッシズムの人間的基礎となるような性格構造を「サド，マゾヒズム的性格」又は「権威主義的性格」とよび，社会経済的要因，イデオロギー的要因とからみあつて歴史において演ずる心理的要因の役割を分析している．(1)

ち，沖縄という文化的社会的背景において，権威主義についての実証的知識を確立するには，まずその数量的表現や比較を可能にする尺度が問題となるが，権威主義の研究にもつとも広く用いられている F scale を吾々の文化において吟味することは，吾々の文化において権威主義を測定する出発点として必要なことと思われる．このような意識にもとづき，F scale を検討するのが本研究の目的である．

Ⅱ 方法および手続

被験者は琉球大学生男子72名，女子40名，小中高校教員男子45名，女子45名計202名である．平均年令は学生20.5才（Range：19才—24才），教員32.7才（Range：21才—61才）である．

質問紙は，T. W. Adorno らによるファッシズム尺度（Fascism scale, Form 40 and 45）を邦語化したものである．F scale の項目内容を同一次元で再現することは，文化的言語的差異のため至難と思われたが，本研究の目的にもとづき，また異つた地域における資料の比較研究により，権威主義を普遍的に定義する操作的基盤をもとめるという課題意識にもとづき，質問紙は original な F scale の内容をできる限りそのまゝ再現することをねらつて作られた* Table 1 はそれらの項目の若干を例示したものである．

Table 1　質問紙抄

1．親や目上の人に対する尊敬と服従の心こそ子供たちが学ぶべきもつとも大切な徳である．
2．もし私たちが十分な意志力さえもつているならば，いかなる困難や弱点も問題ではない．
3．科学や学問は尊重されなくてはならないが，しかし人間の知性では決して知ることのできないことで大事なことはたくさんある．
4．人間の本性から考えて，戦争や争いごとは決してなくはならないでしよう．
11．人の名誉を傷つけた人は必ず処罰すべきである．
12．若い人々は時に反抗心をおこすことがあるが，しかし大きくなるにつれてそれをしづめ，おちついていかなくてはならない．
13．秩序を保ち混乱を防ぐためには，戦前のドイツにおけるような権力を用いることが最善の策である．
14．法律や政治計画よりも，いまこの沖縄でもつとも必要なのは，人々が信頼することのできる，勇気のある，ねばり強い，献身的な少数の指導者がでることである．
15．強姦や子供をおそうような性犯罪は，単なる禁錮ぐらいの罰では不十分である．このような犯罪者は公衆の前で鞭うつとか，あるいはもつとひどい罰を科すべきである．
21．戦争や世の中のもめごとは，いつか全世界を破壊するであろう地震や洪水によつていつかはかたづいてしまうでしよう．
22．もし何とかして不道徳の人間や低脳の人間を追払うことができるならば，大ていの社会問題は解決されるでしよう．
24．人々がもつと口数をへらし仕事に精出すならば，誰の暮し向きももつとよくなるでしよ

* F scaleの邦語化に際しては，牛島義友，坂本竜生の権威主義的態度尺度（Fスケール）を参考にした．（8, pp.575—577）

う．

25．私たちの生活がいかに多く秘密な場所でたくらまれた陰謀によつて支配されているかということを大ていの人は知つていない．

27．社会にとつて，芸術家や大学教授よりも実業家の方がずつと重要である．

29．なれ過ぎは侮りのもとである．

30．何人も苦しみを通してでなければ真に大事なことを学ぶことはできない．

調査年月は1959年12月下旬．応答は「つよく反対」から「つよく賛成」まで，7段階法で応答させ，応答結果を Lickert の簡略法で採点した．回答は無記名で求めた．応答時間は15—20分である．応答カデゴリーを7段階にしたのは，Adorno らの結果との比較を容易にするため，彼らのとつた方法をそのまゝ採用したのである．

上位群下位群分析（good poor analysis）により，尺度の内的緊一性（internal consistency）を検討した．即ち，上位群（25%）と下位群（25%）に分け，尺度の総得点と各項目の7つのカテゴリーへの応答率との関連を λ^2 により検定し，さらに定性相関係数（contingency coefficient）を算出して各項目の妥当性をみた．なお，上位群下位群における各項目の平均得点の差を求めて，Adorno らの結果と比較した．

学生と成人（教員）の群別に，折半法により信頼度を検討した．また，学生，教員別および男女別に，それぞれの群の平均の差を検定した．

Ⅲ 結果および考察

1 結果の統計的考察

(1) 応答分布の状況

各項目の7つの応答カテゴリーへの応答の分布状況を示したのが Table 2 である．

Table 2 の示すように7つのカテゴリーへの応答分布はカテゴリー4（賛成，反対どちらともいえない）を中心とする正常分布型でないことがわかる．分布が極端に偏よつた項目は，①極端に賛成（5，6，7のカテゴリー）へ偏よつた右傾型，②極端に反対（1，2，3のカテゴリー）へ傾いた左傾型，③極端に中央（4のカテゴリー）へ集中した中央とつ出型の3つの類型に分けられる．たとえば，項目10，12，30は80%以上賛成へ，項目8は80%以上反対へ傾いており，項目9と23は，極端な中央とつ出型である．これらの項目は，項目8と10を除いて，他はすべて次に述べる項目分析の結果において選別力（Discriminatory Power）の認められない項目である．なお，項目8，13，18は，つよく反対（カテゴリー1）に極端に集中した項目であり，* その集中傾向は例外なく学生群において著しい．項目19は，学生群と成人（教員）群の分布傾向が逆になつている項目である．これらの項目は，何れも態度の世代的相違をあらわす項目ではないかと思われる．項目8は，若い者にとつて，もつと厳格な訓練が必要だという項目であり，項目13は，秩序を保つためには権力が必要だとする項目であり，項目18は，迷信と先入態度，項目19は，伝統的な道徳や生活様式のよさを保持するためには強制力が必

* 項目18はカテゴリー1のみでなく，1と4の2つのカテゴリーに集中している．

Table 2. 各項目の応答率（%）

項目＼カテゴリー＼群	学生							成人（教員）							全体						
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
1	6%	10	8	14	31	26	6	1%	3	10	9	23	36	18	4%	7	9	12	28	30	11
2	3	14	10	5	19	35	15	1	6	6	16	17	39	17	2	10	8	10	18	37	16
3	0	5	6	11	16	40	22	1	6	10	16	18	33	17	1	5	8	13	17	37	20
4	15	15	6	17	20	19	8	9	9	9	13	33	18	9	12	12	8	15	26	19	9
5	26	23	12	18	8	5	8	16	29	18	22	9	4	2	21	23	15	20	9	5	6
6	19	28	13	6	16	13	6	13	12	20	7	21	19	8	17	21	16	6	18	16	7
7	25	39	15	10	9	2	0	19	32	29	8	7	4	1	22	36	21	9	8	3	1
8	53	26	6	5	6	3	2	41	26	11	10	8	3	1	48	26	9	7	7	3	2
9	2	8	9	59	14	7	1	4	13	7	39	22	13	1	3	11	8	50	18	10	1
10	1	8	3	9	22	28	29	1	6	3	7	21	29	33	1	7	3	8	22	28	31
11	2	9	12	22	31	20	4	3	3	8	14	33	19	19	3	7	10	19	32	20	11
12	1	3	4	7	12	42	31	0	1	4	7	11	43	33	1	2	4	7	12	43	32
13	74	11	5	2	6	0	2	31	9	6	9	27	9	10	55	10	5	5	16	4	6
14	9	15	9	6	20	24	17	9	10	3	12	16	28	22	9	13	7	9	18	26	19
15	6	16	10	11	18	19	20	2	3	6	4	12	24	48	4	10	8	8	16	22	33
16	18	17	17	21	12	12	3	21	20	14	22	14	7	1	20	19	16	22	13	10	2
17	3	8	6	11	24	22	26	0	4	8	17	18	38	16	2	7	7	14	21	29	21
18	44	20	3	24	6	2	2	29	8	4	43	8	8	0	37	15	4	33	7	5	1
19	9	28	14	13	23	12	1	2	7	13	7	31	32	8	6	19	14	10	27	21	4
20	5	17	15	25	17	16	6	7	12	10	26	22	18	6	6	15	13	25	20	17	6
21	30	25	6	29	3	6	1	21	28	12	28	4	4	2	26	26	9	29	4	5	2
22	11	16	11	7	23	13	9	9	17	10	21	17	18	9	10	22	11	14	20	15	9
23	7	20	13	42	8	6	4	18	11	7	42	13	4	4	12	16	10	42	11	5	4
24	16	20	17	17	17	12	2	9	24	7	16	13	23	8	13	22	12	16	16	17	5
25	5	9	17	17	24	20	9	6	10	12	27	24	17	4	5	10	15	21	24	19	7
26	23	34	13	27	2	2	0	10	17	11	49	7	6	1	17	26	12	37	4	4	1
27	14	30	15	20	9	9	3	12	28	16	30	10	2	2	13	29	15	25	10	6	3
28	0	3	17	16	12	30	23	2	9	9	13	11	27	29	1	6	13	15	12	29	26
29	13	38	14	22	11	3	0	19	32	14	13	13	7	1	16	35	14	18	12	5	1
30	1	6	3	5	17	38	32	1	1	3	12	18	32	32	1	4	3	8	17	35	32

要だという項目である．これらの項目は，項目18のほかはすべて選別力の高い項目である．Fig. 1は上記諸項目の各カテゴリーへの応答の分布状況を図示したものである．

(2) 項目分析（Item Analysis）

上位群（25%）と下位群（25%）に分け，尺度の総得点と7つのカテゴリーへの応答率との関連を χ^2 により検定し，さらに定性相関係数（C）を算出して相関の強さを見た．なお上位群下位群の平均得点の差も求めた．Table 3は，各項目の平均得点（M）標準偏差（S. D.），上位群下位群の平均得点の差（D.P.），χ^2 および定性相関係数（C）を示したものである．

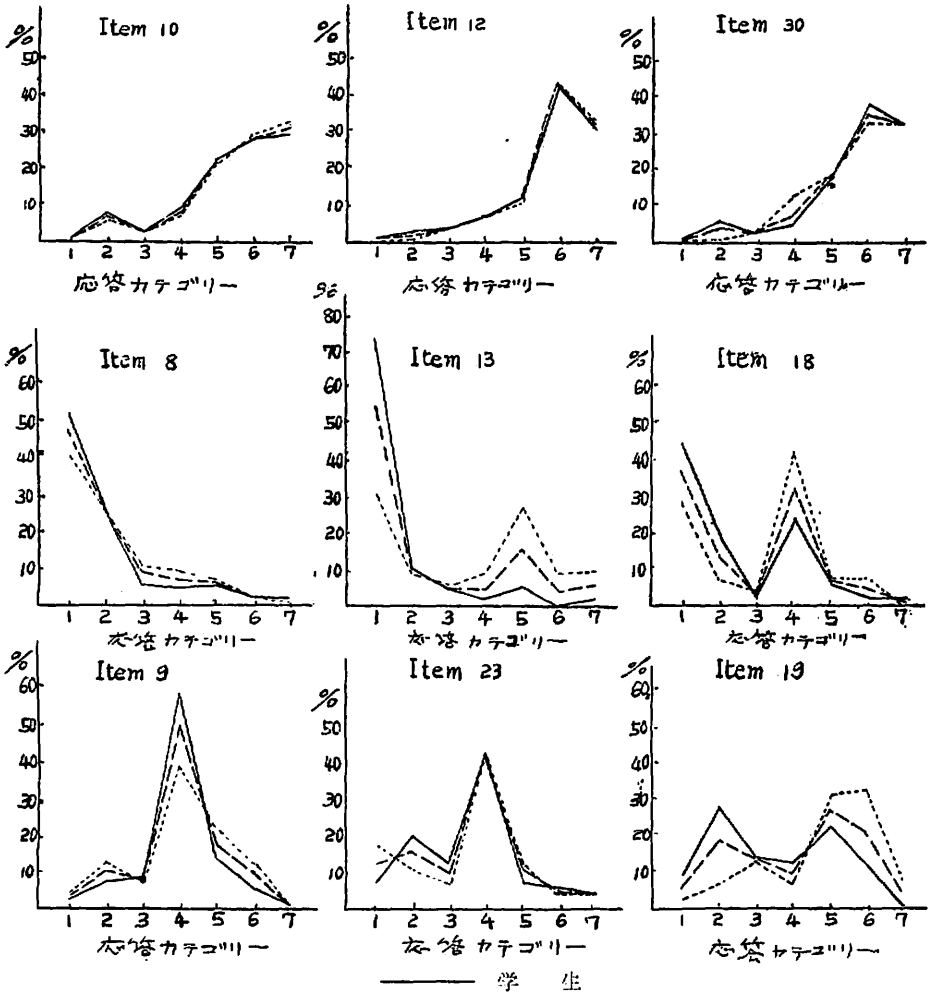
Item 10
Item 12
Item 30
Item 8
Item 13
Item 18
Item 9
Item 23
Item 19
%
応答カテゴリー
学　生
教　員
全　体

Fig. 1

Table 3. 項 目 分 析

Item	M	S. D.	D. P.	χ^2	C
1. Obedience & respect	4.87	1.51	1.76	34.32**	.505
2. Will power	4.12	1.79	.80	12.16	.329
3. Science	5.41	1.41	−.20	4.40	.205
4. War & conflict	4.14	1.81	.96	31.28**	.488
5. Supernatural Power	3.08	1.76	1.64	31.56**	.490
6. Cheerful things	3.70	1.87	2.36	38.16**	.526
7. Bad manners	2.55	1.35	1.76	37.24**	.521
8. Discipline & determination	3.05	1.40	1.72	38.00**	.525
9. Born with urge	4.00	1.20	.52	6.08	.239
10. Infection & disease	5.65	1.55	1.14	15.04*	.361
11. Honor	4.79	1.48	1.60	30.16**	.481
12. Rebellious ideas	5.82	1.28	.58	5.76	.233
13. Germany	2.00	1.56	2.12	39.56**	.532
14. Devoted leaders	4.44	1.98	2.40	34.68**	.507
15. Sex crimes	5.26	1.74	2.66	52.80**	.588
16. Weak and Strong	3.45	1.79	1.58	25.28**	.449
17. Undying love	5.26	1.47	.98	15.80*	.369
18. Astrology	2.57	2.58	1.34	16.64*	.378
19. Force to preserve	4.13	1.76	2.18	46.12**	.562
20. Prying	4.29	1.66	1.12	12.68*	.335
21. Earthquake	2.70	1.53	1.80	38.32**	.526
22. Immoral people	3.96	1.96	2.14	31.84**	.491
23. Wild sex life	3.41	1.59	.60	6.60	.249
24. Talk less	3.69	1.99	1.88	32.88**	.497
25. Plots	4.20	1.64	1.34	20.04**	.408
26. Homosexuals	2.91	1.32	1.12	25.64**	.452
27. Artists-Businessman	3.24	1.69	1.08	12.52	.333
28. No sane person	5.22	1.57	1.42	17.68**	.388
29. Familiarity	3.92	1.41	1.36	22.16**	.426
30. Suffering	5.72	1.67	.70	7.72	.268
M (全)	4.05	1.64	1.43		

** 1%水準で有意
* 5%水準で有意

Table 3 の示すように，各項目の平均値の平均は4.05で，Adornoらの結果が3.81 (2, p.260) であるのに比較してやゝ高い．しかし，これは後に述べる χ^2 テストの結果選別力の認められない項目を含めての値であるので，選別力のない7項目を除いた残りの23項目について平均を求めると3.81で，Adorno らの場合と全く同じ平均値がえられた．

つぎに上位群下位群の平均得点の差 (D. P.) は，Adorno らの場合は平均2.85 (2, p. 260) で，どの項目も D.P. は極めて高く，差は何れも統計的に有意である．それに比して本調査における D.P. は平均1.43でかなり小さい．これも前述の場合と同様に，選別力のない項目を含んでいるので，D.P. の平均値が小さいのは当然のことと思われる．

Table 4.　23項目尺度の項目分析

Item	D. P.	t	
1.	1.84	7.02	**
4.	1.00	2.60	*
5.	1.90	6.46	**
6.	2.32	7.03	**
7.	1.62	7.94	**
8.	2.00	8.10	**
10.	1.30	4.15	**
11.	1.64	5.80	**
13.	2.32	8.69	**
14.	2.32	6.55	**
15.	2.80	10.11	**
16.	1.26	3.90	**
17.	0.98	4.38	**
18.	1.64	5.60	**
19.	2.20	7.53	**
20.	1.18	3.68	**
21.	1.70	6.56	**
22.	1.90	5.72	**
24.	1.90	6.05	**
25.	1.32	4.47	**
26.	1.10	4.38	**
28.	1.36	4.37	**
29.	1.42	4.98	**
M	1.70		

** 1%水準で有意
* 5%水準で有意

選別力の認められた23項目だけについての項目分析の結果については後に述べる.

χ^2 テストの結果は，既に述べたごとく，Table 3 に示すように，30項目中，項目2，3，9，12，23，27，30の7項目は選別力のない項目と認められる.

定性相関係数（C）の値はあまり高くないが，しかしCの最大値がカテゴリーの数によつて制限される点を考慮すれば，この程度で満足すべきものと考えられる.

以上，F scale を邦語化した30項目の項目分析を主として吟味したのであるが，その際に統計的妥当性の認められた23項目だけについて上下分析を行つた結果を示せば，Table 4 のごとくである.

Table 4 の示すごとく，上記の23項目についての項目分析の結果は，D.P. の平均は1.70であまり大きくはないがしかし，t 検定の結果は何れの項目も統計的有意水準で選別力が認められる．項目4のみが5%水準で有意で，他はすべて1%以下の危険率で有意である.

(3) 信　頼　度

学生と成人（教員）の群別に，折半法により信頼度を求めた結果は，学生，.675，教員，.726である．これも Adorno らの場合の.90（2, p.258）に比べると極めて低いが，前述の選別力のない項目が尺度の信頼度を低めていると考えられる.

(4) 標本間の平均の差の検定

学生，教員別および男女別の総得点の平均および標準偏差を Table 5 に，各群別の平均の差の検定の結果を Table 6 に示した.

Table 5. 総点の平均（M）および標準偏差（S. D.）

	学生			教員		
	男	女	全	男	女	全
N	72	40	112	45	45	90
M	118.19	110.54	115.46	121.18	128.67	124.92
S. D.	11.97	14.60	14.56	17.35	7.95	14.76

Table 6. 平均の差の検定 (t-test)

学生・教員差			男・女差	
男	女	全	学生	教員
1.00	6.89**	4.53**	2.79**	2.60*

** 1%水準で有意
* 5%水準で有意

Table 5 および Table 6 の示すように，教員群は学生群に比し，権威主義の得点がより高く，男子においては，学生と教員の間に有意な差は認められない．女子においては，学生と教員の間に，どのグループ間におけるよりももつとも大きな差がみられ，権威主義の得点は教員の女子において，もつとも高く，学生の女子において，もつとも低くなつている．学生群においては男子がより高く，教員群においては女子がより高くなつていて，両群における男女の傾向は逆になつている．要約すれば，もつとも権威主義的なのは教員の女子であり，権威主義の得点のもつとも低いのは学生の女子であり，男子は両者の中間に位する．女子学生群において，権威主義の得点がもつとも低い（項目平均 3.68）ということは，琉球大学における女子学生がとくに選択された集団であることを示唆するものではないかと思われる．権威主義は教育程度や知的能力と negative に相関することが示されているが，(9, pp. 274—279)，琉球における高校生の数が男女ほゞ同数であるのに対し，琉球大学における女子学生数が男子のおよそ3分の1にすぎない点から，本調査の結果は，教育や知的能力の点で，女子学生が選択された集団であることを示唆するものではないかと思われる．

2　項目の内容的考察

F scale を構成する各項目は，権威主義的人格を構成する9つの要因（又は変数）の中の1つ又は2つ以上の要因をあらわすもの，あるいはとらえるものと考えられている．(2, pp. 224—229)．これらの要因は，反ユダヤ人主義(Anti-Semitism)尺度や自民族優越主義（Ethnocentrism）尺度における応答の緊一性をもつともよく説明すると考えられた人格傾向，あるいは臨床的な資料の分析によつて明らかにされた人格要因であつて，それらは複合的全体として単一の personality syndrome を形成すると考えられている．いま，項目分析の結果，統計的有意性の認められなかつた7項目を除いた残りの23項目と，もとの30項目とのふくむそれぞれの人格要因を比較するため，両者の場合における各要因又は変数（variable）をあらわす項目の数を示せば，Table 7 のごとくである．

Table 7. 人格要因とそれをあらわす項目数

人格要因	項目数 30-item scale	項目数 23-item scale
1. 因襲主義	4	3
2. 権威主義的服従	7	4
3. 権威主義的攻撃	8	8
4. 内面傾向への反発	4	3
5. 迷信と先入態度	6	4
6. 力とたくましさ	7	6
7. 破壊性とシニシズム	3	3
8. 投射性	5	4
9. 性	3	2
計	47*	37*

* 1つの項目が2つ又は3つの要因をあらわす場合があるのでスケールの項目数とは一致しない．

Table 7 の示すように，各要因をあらわす項目数は均等ではない．F scale におけるこれらの要因は統計的意味における clusters ではない．即ち1つの変数内の項目相互間の相関が，異る

変数内の項目相互間の相関よりとくに高いのではない．各項目はたゞ全体の尺度と有意に相関するような性質のものである．従つて，これらの変数は a priori な説明概念である．いま，30—項目尺度と23—項目尺度の場合における，それぞれの変数のあらわす項目数をみると，権威主義的攻撃の要因では，全項目が残り，権威主義的服従の要因では，3項目減つている点が，両者の唯一の相違点で，この1点を除けば，各要因をあらわす項目数の割合は大たいつり合つているといえる．従つて上記2要因の割合に関して若干の改善をすれば，両者はそのふくむ人格要因の点で内容的に近いものになるといえよう．

3 残された問題

以上の統計的および内容的考察によつて，本調査で統計的妥当性の認められた23項目を基礎資料として，吾々の文化において統計的に有意味で，しかも original な F scale の内容に近いスケール作製の可能性が示唆されたようにおもう．たゞし，上述の23項目について，統計的に項目の妥当性は認められても，それが California F scale の場合のように，人種的偏見やエスノセントリズムと高く相関するかどうかについては，本調査の資料のみでは何もいえない．これについてはさらに今後の検討にまたねばならない．

Ⅳ 要　　約

沖縄の文化的社会的背景において権威主義の意味を探究する出発点として，original な California F scale を邦語化し，大学生および小中高校教員を被験者として調査を行つた．これらの被験者に質問紙を配布し，無記名で回答を求めた．7段階法で応答させ，Lickert 法（簡略法）で採点した．応答結果について，上下分析により項目分析を行い，項目の妥当性を検討した．その結果7項目は統計的妥当性が認められなかつた．統計的妥当性の認められた23項目に対応する人格要因の割合は，権威主義的服従と権威主義的攻撃の2要因を除いて，他は original な F scale と大たい同様であつた．この23項目を基礎資料として，F scale の内容に近い尺度作製の可能性が示唆された．

30項目の質問紙の折半法による信頼度は，学生，.675，教員，.726で，Adorno らの場合に比し極めて低いが，上述の選別力のない項目が信頼度を低めていると考えられる．

学生，教員別，男女別の平均の差を検定した結果，男子における学生と教員の間には有意差が認められないが，他はすべて有意の差が認められた．

本研究はひとつの出発点にすぎず，多くの問題を今後に残している．

追記：この研究を遂行するにあたつて終始御助言をいたゞいた心理学研究室の赤嶺，東江助教授，また結果の処理にあたつて心よく御協力くださつた比嘉とみ子氏に心から感謝の意を表したい．

文 献

1 フロム著，日高六郎訳，自由からの逃走，創元社，1951.
Fromm, E., *Escape from Freedom.* New York, Farrar & Rinehart, Inc., 1941.

2 Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., & Sanford, R. N., *The Authoritarian Personality*, New York, Harper, 1950.

3 南 博，体系社会心理学，光文社，1957.

4 Jensen, A. R., Authoritarian Attitudes And Personality Maladjustment, *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 54, 1957.

5 Prothro E. T. and Keehn, J. D., The Structure of Social Attitudes in Lebanon, *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 53, 1956.

6 Christie, R. & Jahoda, M., *Studies in the Scope and Method of "The Authoritarian Personality"*. Glencoe, Ill, Free Press, 1954. pp. 226—275.

7 Eysenck, H. J., *The Psychology of Politics.* New York, Praeger, 1954.

8 牛島義友 教育標準検査精義，金子書房，1960.

9 Stewart, D. and Hoult, T., A Social-Psychological Theory of the Authoritarian Personality, *Amer. J. of Sociol.*, LXV, 1959.

A STUDY OF THE CALIFORNIA F SCALE

Matsusuke YONAMINE

ABSTRACT

In order to explore the meaning of authortarianism in Okinawa, a start was made by studying in this culture the nature of *the California F scale* which has been used most frequently as a measure of authoritarian attitudes. A Japanese translation of the original F scale (Form 40 and 45) was prepared and administered under conditions of anonymity to 112 students of the University of the Ryukyus and 90 elementary, junior high, and senior high school teachers in Okinawa.

The χ^2 test was employed as a technique of item analysis to assay internal consistency of the scale items. Twenty three items of the Japanese translation of the F scale differentiate significantly between the highest and the lowest quartiles. The ratio of numbers of the personality factors or variables being represented by items are approximately similar in the both instances of 23-item and 30-item scales except in the instances of variables of authoritarian submission and authoritarian aggression.

The odd-even coefficients of reliability for the scale of the Japanese translation of the F scale, when corrected by the Spearman-Brown formula, are .675 for the students, .726 for the teachers. These values are much lower as compared with .90 found by Adorno and others, but it may be considered reasonably adequate for an initial attempt. The low reliability may in part due to the seven items found to be lacking in validity.

The thirty-item scale differentiates significantly between the students and teachers, and between men and women.

This study is only an initial attempt, and many questions still remain open, to be investigated in further studies.